



変わらぬ村、変わる人びと

熊谷 圭知

(くまがい けいち)

お茶の水女子大学教授

自給自足の生活

バブアニューギニア北部を流れる大河セピック川、その南の支流域にあたるブラックウォーターが、わたしの二〇年来の調査地のひとつである。その名のとおり、泥炭湿地特有の黒く沈んだ水が特徴のこの

地域には、広大な湖面に鳥たちが乱舞する、日本なら国立公園に指定されそうな風景が広がっている。

わたしがはじめてこのブラックウォーターを訪れたのは、一九八六年のこと。今年が七度目の訪問である。ブラックウォーターへの道のりは遠い。海岸の町ウエワクから、乗り合いトラックで、セピック川下流の町アンゴラムへ。そこから、モーターカヌーで二時間かけ、二日かかりでたどり着く。

この二〇年で、村の暮らしは、どのように変わったのだろうか？村と村人の外見には、一見すると大きな変化はない。周囲の湿地林に生えるサゴヤシの澱粉を採取して主食とし、湖で豊富に獲れる魚を副食とするという食生活はむかしのままである。雨季には、村中の土地が水没してしまうため、換金作物の栽培はできず、現金収入とよべるものはほとんどない。バブアニューギニアの村ではおなじみの、村人経営の食料品や雑貨を商う小さな店もここにはない。現金を使わない、自給自足の日常生活が維持されている。村にはカトリック教会が入っているが、全身に刃物で傷をつけ、その癍痕がワニのウロコのように体を覆う、伝統的な男性の成人儀礼は残っている。精霊堂は、成人儀礼を受けた男たちだけの空間であり、女性や子どもはそこを避けておらなければならない。

祖先から続く悩み

大きく変わったのは、人口が増えたことだ。一九九三年には、二五〇人ほどだった

村の人口は、今では、五〇〇人を超えている。これは、町からリターンする村人が増えたことに加え、子どもの数が多くなったことが大きな理由になっている。世帯調査をすると、年子に近い間隔で子どもが生まれている。年配の女性によれば、むかしは、子どもがことは覚えて十分に自分一人の力で歩けるようになる三、四歳ころまでは、夫は精霊堂で寝泊りし、性交渉は避けられていたものだという。

今回の滞在中に、村人といくつかのグループにわかれてミーティングをする機会をもった。驚いたのは「村の問題」は何かという問いに、若い母親たちが、公の場で堂々と自分たち女性の重労働が大きな問題だと語ったことだ。子どもの世話をしながら、森にサゴヤシを採りに行き、薪を集め、水を汲み、家族のために食事の支度をする、それがいかに大変な労働であるか……こうした語りは、村では、これまで聞くことができないものだった。

ある女性は、「わたしたちは祖先と同じ暮らしをし、祖先と同じ悩みを抱えている」と語った。その悩みとは、現金収入がなく、塩も、洗濯をする石鹸も、子どもに服を買う金もないことである。ここでは祖先の暮らしは、決して「伝統文化」として尊重されるものではない。

町から遠く、ガソリン代は高く、現金収入をえるために、サゴヤシや燻製の魚を町に売りに行きたくとも行けない。人びとの意識や価値観は変わっている、しかし村は変わることができない。その葛藤が、村人を覆っている。

ミーティングで語る女性たち



若い世代の家族では
子どもの数が増えている

